

I ブレードランナーを 読み解く

人間存在の本質に疑問を投げかけてきた『ブレードランナー』は、従来のSF映画とは、何が違うのか？ 35年の時を経て結ばれた二作品の真実にせまる。



屋台で会話をするリック・デッカー。デッカーの注文に対して、店員が日本語で応えている。 © Capital Pictures/amanaimages

レプリカントの 人間性について

内田 樹

(思想家)

創造主でもなお、 創造できないもの

主題を意識しながら映画を観るということをふだんはしない。いつもは何も考えずにぼおつと見ている。けれども、今回は『ブレードランナー』新旧二作の主題についての寄稿依頼だったので、主題について考えながら観た。

二作を貫く変わらない主題は「人間とレプリカントはどこが違うのか？」という問いであった。それは「人間の人間性を構築する条件とは何か？」という問いに言い換えることができる。『フランケンシュタイン』から『鉄腕アトム』に至る、人造人間物語すべての永遠不朽の主題である。

人間性とは最終的には何なのか？ それ以外のすべての条件が人間と同じである人工物を作り得たとしても、それだけは与えることができないものがあるとしたら、それは何か？

これは実は人類の歴史と同じだけ古い問いなのである。中東に発祥した一神教では、創造主が人間を創ったことになっているが、創造主でもなお創造することができないものが一つだけあった。

それは「神を畏れる心^{おそ}」である。もし神がそ

の威徳に真にふさわしいものであるなら、神の命じるままに機械的に神を敬う、腹話術師の操る人形のようなものを創造したはずはない。神は必ずや自力で神を見いだし、神を敬い、神を畏れることができるほど卓越したものを創造したはずだというのがユダヤ一神教のロジックである。

人間には「神を畏れる心」が標準仕様ではビルトインされていない。人間は自己努力を通じて「神を畏れる」能力を獲得しなければならぬ。すべての被造物のうちにあつて、人間だけがその無能と有限性に気づき、不安を覚え、苦悩する。そして、その不安と苦しみを通じて「全能にして無限のものである神」という観念を自力で創り出し、それを畏れる心を持つようになる。おのれの有限性を通じて神の無限性を構想しうる力、それが人間の人間性をかたちづけている。

『ブレードランナー』世界の 哲学的な主題は何か？

この古典的な「人間性」の定義は『ブレードランナー』にも適用できるであろうか。それが適用できれば、それに基づいて、人間とレプリカ

自分の正体に疑いを持ったレイチエルとK。自分が人間でないと知りつつ、人間的なものになりたいと願うロイ・バティとジョイ。人間として生まれたものと、人間になろうとするもの、どちらがより人間の名にふさわしいのか。思想家の内田樹が、映画『ブレードランナー』の哲学的主題について考察する。